

調査

世界遺産認定後の産業遺産の現状と課題

～『富岡製糸場と絹産業遺産群』～

はじめに

本年（2015年）7月、ドイツのボンで開催された第39回世界遺産委員会において、わが国推薦の『明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業』が世界文化遺産に新規登録された。その構成資産は23を数えるが、そのうち、最多の8資産が長崎県初の世界遺産に登録されている。

この世界遺産はいわゆる産業遺産であり、姫路城や富士山などのように見た目だけでそれとわかるものではなく、その価値の理解には観る人にもある程度の知識が要求される。

そこで本稿では、昨年6月に、わが国18番目の世界遺産として、また、近代化を支えた産業遺産としては初登録となった『富岡製糸場と絹産業遺産群』の現状と課題をレポートする。

I. 『富岡製糸場と絹産業遺産群』について

1. 遺産の概要

群馬県の世界文化遺産『富岡製糸場と絹産業遺産群』は、フランスから導入した技術に独自の技術革新を重ね、生産量が限られていた蚕の繭から取る絹の原料“生糸”の大量生産に成功したことにより、特権階級が独占していた絹製品を、世界中の一般の人々の間に広め、その生活や文化を豊かなものに変えた、という証を今に伝える近代産業遺産である。

その構成資産は、群馬県富岡市「富岡製糸場」、同伊勢崎市「田島弥平旧宅」、同藤岡市「高山社跡」、同甘楽郡下仁田町「荒船風穴」の4件である。

群馬県『富岡製糸場と絹産業遺産群』



出典：群馬県企画部世界遺産進課パンフレット

2. 構成資産について

(1) 富岡製糸場

富岡製糸場は、当時わが国の輸出品の大半を占めていた生糸の品質向上と増産を図るため、1872年に明治政府が設立した官営工場である。この工場には、蒸気機関やフランス式繰糸器などの西洋技術が導入され、ここから日本全国に器械製糸技術が伝わった。

その後、製糸場は1893年に民間に払い下げられ、戦後の1952年には、所有者の片倉製糸紡績(株)（現在の片倉工業(株)）が自動繰糸機を導入してオートメーション化による生産合理化を図った。しかし、生糸の世界的な価格競争の影響を受け、1987年に操業を停止、2005年に工場内の全ての建造物を富岡市へ寄贈した。工場内の建造物群は、創業当時の姿がそのままの形で現在に残っている。

富岡製糸場の世界遺産推薦理由は、「仏の器械製糸技術を導入した日本初の本格的製糸工場」「和洋技術を混交した工場建築の代表」のほか、製糸・養蚕技術の発展への貢献などである。

[世界遺産の位置略図] (群馬県)



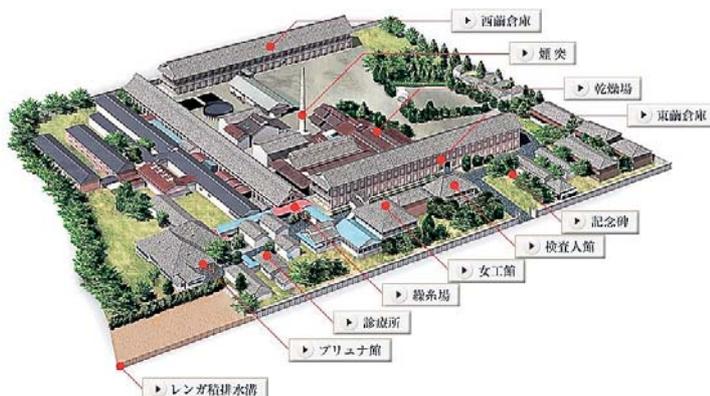
出典：「富岡製糸場と絹産業遺産群」三ヶ国語パンフレット

富岡製糸場：東繭倉庫



写真提供：群馬県企画部世界遺産課

富岡製糸場敷地内図



出典：富岡製糸場HP (ホームページ)

(2) 田島弥平旧宅

田島弥平旧宅は、1階を住居とし、2階は瓦屋根に換気設備を取り付けて蚕室とした住居兼蚕室である。近代養蚕農家の原型であり、蚕の餌である桑を保管・加工する桑場を備えている。周辺は、江戸時代から蚕種（蚕の卵）製造の盛んな地域であり、田島弥平は、通風を重視した養蚕法「清涼育」を大成し、1863年に越屋根のある住居兼蚕室を完成させた人物である。この旧宅は現在もその子孫が住居としており、建物内部は立入禁止となっており、見学は外観と庭に限られている。

田島弥平旧宅の世界遺産推薦理由は、後述する「高山社跡」「荒船風穴」と共通する優良品種の開発・普及のほか、「近代養蚕農家の原型」といえる蚕室構造を残していること、「清涼育」の開発を含め、明治初期の養蚕業では主導的役割を果たしたこと、直接販売による海外交流を行ったことなどである。

田島弥平旧宅



写真提供：群馬県企画部世界遺産課

旧宅内敷地図



出典：田島弥平旧宅パンフレット

(3) 高山社跡

高山社跡は、高山長五郎が養蚕法「清温育」を確立したあと、その普及のため1884年に「養蚕改良高山社」を設立し、国内のみならず、中国や朝鮮半島からも生徒を受け入れるなど、長らく養蚕の実習場となった所である。「清温育」とは、長五郎が開発した換気と温湿度管理をきめ細かく行う養蚕法のことであり、わが国近代養蚕法の標準となった。

現在残る建物は、「清温育」に最適な蚕室を目指して、1891年に建設された住居兼蚕室である。その構造は、田島弥平旧宅と同じ様式の越屋根を採用、換気については2階の蚕室に大きな掃き出し窓とすのこ状の天井、蚕棚の下には通気口を備える。温度の調節には、1階に囲炉裏、2階に火鉢置き場が設けられており、蚕室を6室に仕切ることで、部屋別での温湿度調節を可能としている。

高山社跡の世界遺産推薦理由は、「田島弥平旧宅」「荒船風穴」と共通する優良品種の開発・普及のほか、「清温育」実施のための蚕室構造の開発や、教育機関として養蚕技術の普及に貢献したことなどである。

高山社跡



内部の蚕室



写真提供：群馬県企画部世界遺産課

(4) 荒船風穴

荒船風穴は、自然の冷気を利用したわが国最大規模の蚕種貯蔵施設である。わが国では、19世紀後半には夏でも低温の風が出る“風穴”と呼ばれる場所に蚕種を貯蔵することでふ化の時期を調節し、年複数回の養蚕を行う試みが始まっていたが、同地には、岩の隙間から夏でも2℃前後の冷風が吹き出すことから、その利用施設として1905～1914年にかけて3つの施設が建設された。ここには、国内40道府県をはじめ、朝鮮半島からの蚕種も貯蔵され、この施設を利用することで、それまで、年1回春だけ行われてきた養蚕が、年複数回行えるようになり、繭の増産に貢献した。

荒船風穴



写真提供：群馬県企画部世界遺産課

荒船風穴の世界遺産推薦理由は、「田島弥平旧宅」「高山社跡」と共通する優良品種の開発・普及のほか、養蚕業を年に複数回行うには蚕種貯蔵施設風穴の存在は大きく、同風穴がその典型例かつ最大規模だったことである。

Ⅱ. 『富岡製糸場と絹産業遺産群』の現状

1. 資産の保全

(1) 群馬県

群馬県は、昨年の世界遺産登録をきっかけに、同年「群馬県世界遺産・ぐんま絹遺産継承基金」を設立し、4つの世界遺産だけでなく、県内の絹に関する遺産や文化の継承に資する事業に役立てることにしている。

同基金には、県の一般財政からの拠出はなく、全て寄付による積立金により運営されており、その寄付の方法には、納付書によるものに加え、個人にはふるさと納税でも可能としている。昨年は、地元の群馬銀行をはじめとして、計約1,000万円の寄付があり、絹関連遺産を有する自治体が行う保存・修理工事に対し、同基金から補助金を拠出するという形をとっている。

(2) 富岡市

富岡市は2008年、製糸場の保存・活用及び周辺整備事業の財源に充てるために、積立目標額を設けない「富岡製糸場基金」を創設した。その原資には、14年度まで製糸場入場料収入の5割を充当していたが、15年度より入場料を500円から1,000円に値上げしたことに合わせて、その割合を6割に引き上げている。13年度末の残高は2億32百万円で、原則的に富岡市が活用することとしており、民間団体の製糸場利活用関連事業などへは拠出していない。

(3) 伊勢崎市、藤岡市、下仁田町

伊勢崎市は、群馬県と同じく、世界遺産に認定された2014年の年末に「田島弥平旧宅活用基金」を設立し、ふるさと納税による寄付を可能としている。また、藤岡市は、「藤岡市ふるさと基金」のなかで高山社跡の保存・修理を行うものとしており、下仁田町は、ふるさと納税の活用を視野に、協力金や寄付金を積み立てる「荒船風穴基金」(仮称)を今秋新たに創設して、風穴を守るための態勢を充実させるとしている。

2. 入場者数

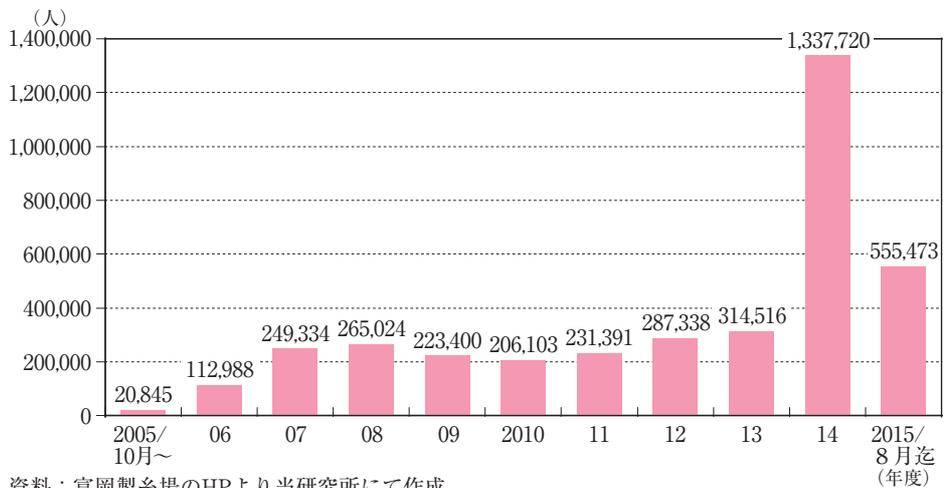
(1) 富岡製糸場

富岡製糸場への入場は、富岡市が片倉工業(株)より建造物の寄贈を受けた2005年の10月から始めた。翌06年度から世界遺産登録の前年度である13年度にかけての年平均入場者数は20万人台前半だったものの、世界遺産に登録された14年度は一気に130万人を超えており、地元シンクタンク(一財)群馬経済研究所が13年に推計した「4資産の合計で年間74万人」を、当施設だけで軽く

上回った（図表1）。

また、本年度も引き続き多数の入場者が期待されているが、8月までの入場者数をみると、1カ月平均111千人が来場しており、これを年間ベースにすると2年連続の133万人超えが予想される。

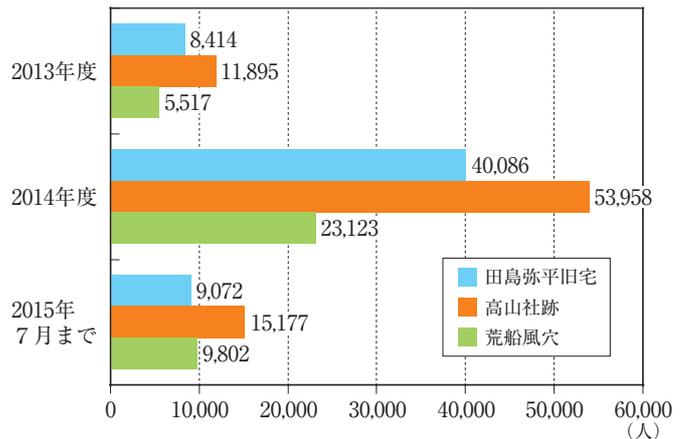
図表1 富岡製糸場の入場者数



(2) 田島弥平旧宅、高山社跡、荒船風穴

富岡製糸場を除く各構成資産の入場者数も、世界遺産に認定された14年度に大きく伸びている（図表2）。7月迄の入場者数から、それぞれ今年度の入場者数を予想してみると、「田島弥平旧宅」27,216人、「高山社跡」45,531人、「荒船風穴」19,604人（荒船風穴は、毎年12月～翌年3月までの4カ月間、冬期閉鎖となるため、8カ月間での数値となる）となり、この数値を前年度と比較すると、「高山社跡」と「荒船風穴」は、ともに前年度比8割強となるが、現役の住居であり、その見学場所が限られている「田島弥平旧宅」のみ6割台後半と、構成資産間での差が早くも見受けられる。

図表2 富岡製糸場を除く構成資産の入場者数



3. 観光ガイド

各構成資産には、資産の説明を行うガイドが常駐しているが、本稿では、富岡製糸場においてガイドを行っている「富岡製糸場解説員の会」について採り上げる。

(1) 会の成り立ち

「富岡製糸場解説員の会」（会員96人）の発足は、製糸場を片倉工業(株)が所有していた1996年に遡る。群馬県においてJR東日本のディスティネーション・キャンペーン（DC=JR・指定された自治体・地元の観光業者などが、協働で実施する大型観光キャンペーン）が展開された際、JR

が片倉工業(株)に対して製糸場の観光客への開放を交渉した結果、夏休み限定公開が決定した。これに伴い施設の説明をする人が必要となったため、その役割を退職校長会富岡甘楽支部へお願いしたことが、会を設立するきっかけとなった。

解説員の会のメンバーは、2008年までは旧退職校長会の人が多数を占めていたが、同年にメンバーの公募を始めて以降、現在では民間企業を退職した人がその多くを占めている。また、その出身地も埼玉県をはじめ、県外在住の人も数名所属するなど、半分以上が富岡市外・群馬県外出身となっている。

(2) 利用料金

解説員の会による製糸場のガイドは、今年3月までボランティアであった（富岡市から半日報償費の支払いがあり、入場者からはガイド料を徴収していなかった）が、4月より入場者から代金を徴収する有料ガイドへと移行した。1回の解説は基本40分となっており、料金は大型バスなど団体客20人以上の場合は解説員1人につき3,500円で、そのうち2,000円を解説員個人が受け取る。個人客については30分毎の定時解説があり、1人当たり200円を徴収している。

(3) ガイドの育成

ガイド（解説員）の育成は、製糸場内に事務所を構えている富岡市の富岡製糸場戦略課が担当しており、年2回の解説員養成講座を毎年開催している。

ガイドの育成という、観光客のおもてなしにおける重要なファクターにおいて、行政自らが製糸場解説マニュアルを作成し、これに則った歴史に基づく正確な説明を各解説員に求めていることが、入場者の満足度を高めている。解説員がガイドに慣れてくると説明に主観がどうしても入りがちになることから、それを避けるため、市職員が1年間かけてメンバー96人全員のガイド状況を確認し、当該マニュアルから逸脱した解説をしないよう指導している。解説員それぞれの個性は出して良いが、説明はマニュアルから逸脱しないよう徹底しているのである。また、市では、解説員の見聞を広めるために、長野県岡谷市や横浜など、絹産業関連の地へ年1回の視察研修旅行も主催している。

(4) 組織の現状

解説員の会のメンバーは、今年4月からのガイド有料化を機に、富岡市の第3セクターである(株)まちづくり富岡と個人契約を結んだ。この会社は、市からの委託により、製糸場の駐車場管理や団体予約の受付、製糸場の券売及び場内売店の運営、まちなか観光物産館「お富ちゃん家」の運営を行っており、ガイドの仕事は、同社から解説員個人が請け負う形となっている。メンバー

は、最低年1回はガイドを行わないと、会員資格を失ってしまうルールとなっており、他地域のガイド組織によく見受けられる、“所属はしているが、ガイドは全く行わない”いわゆる幽霊会員がないのも特長である。

4. 民間の活動

(1) 富岡製糸場

【NPO法人富岡製糸場を愛する会】

NPO法人富岡製糸場を愛する会（高橋伸二理事長、会員1,400人、うち1／3は県外在住）は、昨年6月に特定非営利法人に認定された地域活動団体である。

① 会の成り立ち

当会の結成は、1980年代にまで遡る。養蚕農家が最も多かった旧額部村^{ぬかべむら}の農協組合長や群馬県議会議員を歴任した農民詩人・高橋辰二氏（高橋理事長の父）の没後20年となった87年、富岡製糸場が閉鎖され、その年に文学仲間有志が「文化検証会」を立ち上げた。これが、富岡製糸場を愛する会の前身である。同会において「富岡製糸場は日本の近代化の原点である。製糸場の維持費は年間億単位とも言われ、民間企業ではこれに耐えられない。このままではいつの日か取り壊されるかもしれない。この施設を保存して地域のために生かすにはどうすればよいのか」などと、製糸場の将来を危惧する声上がり、翌88年に「富岡製糸場を愛する会」として、勉強会を始めたことが、現在まで続く活動のはじまりとなった。

その後、愛する会では、製糸場を中心に地域活性化を支援することを目的に、製糸場の価値についての学習会や講演会などを継続的に行ってきたが、その活動が2001年にマスコミで紹介されたことにより、その存在が当時の群馬県知事・小寺弘之^{こでら}氏の知るところとなった。それから2年後の03年、小寺知事は製糸場が世界遺産登録を目指すことを正式表明したが、この表明に対する県議会や県庁関係者の反応は鈍かった。

そこで、愛する会では同年秋に、「世界遺産への道のり」という大規模集会を開催して、製糸場の世界遺産としての価値を地元・富岡市民に伝えることに成功した。すると、この地元の盛り上がりを見た県が、ようやく遺産登録に向けて動き出した。まさに、「富岡製糸場を愛する会」が市民主導による世界遺産登録へのうねりを生み出すこととなったのである。

これをきっかけに、愛する会ではこれまでの同好会的な活動から、世界遺産登録支援活動へ本格的に取り組み始め、翌04年には、地元のしののめ信用金庫（本店：富岡市）が、地元支援の一環として同会への協力を表明し、その事務局の役割を引き受けた。

② 資金面

NPO法人ではその活動資金を集めることが課題となるが、愛する会では、パンフレットやジャ

ンパー、帽子など製糸場関連グッズを製作・販売してその運営費に充当しており、また、理事長自らも寄付金集めに奔走し、私財まで投じている。高橋理事長は「愛する会は、補助金などには一切世話にならない、というスタンスを貫いている。また、こういうことができないと、自らの力だけで運営していくことはできないし、行政や外に対する発言力を持つことができない」と語っている。

③ 活動内容

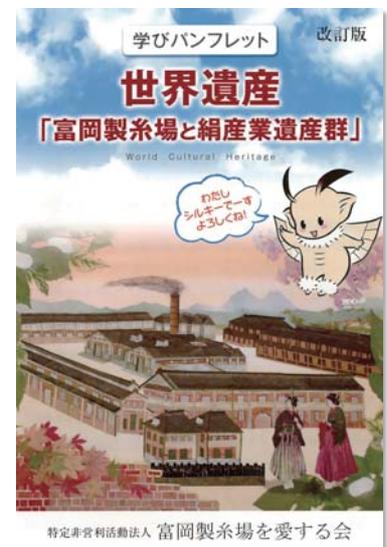
愛する会は、2006年に富岡製糸場の価値への理解を広げるための「学びパンフレット」を作成し、県内の学校や公民館、公共団体への無償配布を始めた。このパンフレットは、世界遺産に認定された2014年を含めて2度の改訂を行い、一般へも1部500円で販売中である。

次に、2013年には地元の絵手紙サークル「昌の会」と提携して「富岡製糸場 絵手紙かるた」を完成させた。製糸場の文化的・歴史的価値を子供から大人まで楽しく学べるよう試作を重ね、約1年かけて製作した力作であり、会が携わって開発したもののなかでもかなりの評判となっている。

富岡製糸場 絵手紙かるた



学びパンフレット



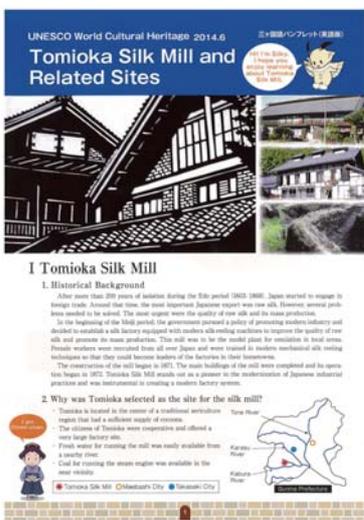
資料提供：NPO法人富岡製糸場を愛する会

続く翌14年6月には、日・英・中3ヶ国語パンフレットを作成し、富岡市民への無償配布を行っている。

3ヶ国語パンフレット
日本語バージョン

英語バージョン

中国語バージョン



資料提供：NPO法人富岡製糸場を愛する会

また、愛する会では、高橋理事長がこれまで述べてきたような運動にのめり込むきっかけともなった富岡製糸場創建の物語「かわたれの槌音^{つちおと}－維新の産業革命と富岡製糸場」(1997年発刊、田村貞男・著)を、高橋理事長が実行委員長となって、名匠・大林宣彦監督に映画化してもらうプロジェクトにも取り組んでいる。

④ 認められた活動

NPO法人富岡製糸場を愛する会は、本年1月に、世界遺産登録の原動力となる活動を続けてきたことが認められ、(公財)日本パブリックリレーションズ(PR)協会が、長年にわたり広く社会や地域の発展に寄与し、奨励に値する成果を収めた個人やグループを顕彰する2014年度「第3回 日本PR大賞 シチズン・オブ・ザ・イヤー」を受賞した。

(2) 「田島弥平旧宅」、「高山社跡」、「荒船風穴」

3資産の地元にも活動している民間の力がある。「田島弥平旧宅」には“ぐんま島村蚕種^{しまむら}の会”が、「高山社跡」には“高山社顕彰会”、「荒船風穴」には“荒船風穴友の会”と、それぞれ民間団体が活動しており、各構成資産について世界遺産としての価値の継承と、それを核とした地域活性化に取り組んでいる。

(3) 群馬県全体

【富岡製糸場世界遺産伝道師協会】

富岡製糸場世界遺産伝道師協会(会長:近藤 功氏、会員250人)は、世界遺産『富岡製糸場と絹産業遺産群』の価値とその保護への理解を深めてもらうために、群馬県内全域において活動を行っている団体である。

① 会の成り立ち

伝道師協会の活動は、小寺知事の富岡製糸場世界遺産登録推進表明を受けて、群馬県が2004年に「富岡製糸場世界遺産伝道師養成講座」を開講し、その初回受講者が自発的に活動を始めたことに始まる。

② 会の活動

伝道師協会はいわゆる観光ガイドではなく、県内地区のイベントやショッピングモール、小学校などに出向き、『富岡製糸場と絹産業遺産群』の世界遺産としての価値を地元伝える役割を担っている。製糸方法の1つである、繭から糸を手で巻き取る作業を伴う「座繰^{ざぐり}製糸」を行うことのできるメンバーもあり、出先で実演することもある。

③ 認められた活動

富岡製糸場世界遺産伝道師協会は、本年9月に、『富岡製糸場と絹産業遺産群』の文化的価値

を伝える活動が世界遺産登録として結実し、地域の活性化につながった、との評価により、サントリー文化財団が地域文化の発展に貢献した活動を顕彰する「第37回 サントリー地域文化賞」を他地域の4団体とともに受賞した。

Ⅲ. 富岡製糸場を中心とした絹産業遺産群の諸課題

(1) 富岡製糸場

① 少ない見学場所

製糸場の敷地面積は約54,000㎡であるが、現時点で観光客に開放されているのはその2割程度と少ない。また、大小100棟あまりの建物のうち、現在、内部を見学できるのは、国宝の巨大倉庫「東置繭所」の1階部分と、同じく国宝で自動繰糸機が設置されている「繰糸所」の2棟のみとなっており、機械も動いておらず、物足りなさを感じてしまう見学者も見受けられる。ただし、器械による実演は、明治5年にフランスから導入した繰糸器のレプリカを使って、世界遺産に登録される以前から東置繭所のなかで行っている。

② 見学エリアについて

見学エリアの拡大については、西置繭所の工事が既に始まっているが、その完成にはあと5年程かかり、また、それに耐震補強等を行ってからの見学開放となる。また、昨年2月の大雪により崩落した大正時代の建物「乾燥場」の修復にも5年かかるなど、西置繭所から始め、東置繭所、繰糸所と、敷地内の建物を順に修復し終わるには、あと30年程かかる見通しとなっている。

③ リピーター対策

富岡市が行ったアンケートによると、製糸場へのリピーターはまだ少ないとのことであった。今後予想される、来場者が一段落した後の落ち込みをどう食い止めるのかが課題の1つとして挙げられる。

市の富岡製糸場戦略課では、場内展示の変更や企画展の開催など入場者を飽きさせない工夫に努めているが、今後は2年後を目処に、製糸場の近隣に、場内に設置してある器械のレプリカを数台設置して稼働させることを計画している。「富岡製糸場ではこのような作業が行われていた」と生糸の生産を観光客に実際に見せることが、リピーターの確保と来場者の製糸場への理解を深めることにつながるものと考えている。

④ 外国人観光客

世界遺産の認定は外国人観光客の来訪も期待されるが、市によると「5言語対応（日・英・仏・中・韓）の音声ガイド機械の貸し出し状況（1台200円）から推計すると欧米人が多いものの、その数は入場者数の1%未満とかなり少ない。しかし、首都圏からのアクセスの良さから、5年

後の東京オリンピックの開催を、外国人観光客を取り込むビッグチャンスと捉えている。

⑤ ガイドの課題

富岡製糸場の案内は、姫路城や法隆寺のような一目瞭然のものとは異なり、停止している工場の説明となることから、何故このような工場を作ったのかなどと非常に難しく、堅い説明になりがちとなる。そこで、先述した富岡製糸場解説員の会では、基本的な説明は市が作成したマニュアルから逸脱しないように心がけつつ、ガイドそれぞれの個性を生かす工夫をしている。

また、狭い敷地内でのガイドとなるため、例えば混み合っている場合、ベテランガイド同士は、互いに目配せしながら、自身が引率している観光客への説明と、他のガイドが引率する観光客への説明がバッティングしないよう、観光客をうまく誘導していくが、新人ガイドはそうはいかず、どうしてもガイドによるヒューマンスキルとテクニカルスキルの差が出てしまう。そこで、解説員の会におけるミーティングの際には、直面した問題などに対して自分はどうか対処したのかなど、経験したことについて全て報告を行い、会社や市、解説員同士で情報を共有するようにしている。

⑥ 地元への効果

富岡市には宿泊施設が少なく、車で30分かかかる隣の安中市にある温泉記号発祥の地・磯部温泉が最寄りの宿泊地といったところである。市によると、「磯部温泉から製糸場までの直通バスを運行してみたが、利用客は少なく、また、昨年度大規模増床した国内最大級のアウトレットモール“軽井沢プリンスショッピングプラザ”のある長野県軽井沢町には、富岡市から高速道で30分強で到着してしまうことから、“軽井沢に遊びに行く途中（帰り）に富岡に寄る”といったパターンも多い」とのことであった。一方、「製糸場の世界遺産認定までは、市内の商店街もシャッターが閉まっている店が多かったが、認定後には空き店舗が減ってきた。しかし、地元の人が新たに事業を始めたり、市内他地区から進出してきたのではなく、市外や他県など、外部からの出店が増えたことによるものである。これは悪いことではないが、‘外資’による店舗は、観光客が減り始めると直ちに撤退する傾向があるので、もっと地元の人達にもがんばってもらいたい」としている。

さらに、製糸場からまちなかに観光客を回遊させることも課題となっている。市内には大人数の食事をまかなえる店がなく、団体客は他地域に流れており、観光客をまちなかへ向かわせる仕掛けが乏しい。市では、まちなかにボランティアガイド「まちなか観光ガイド」を待機させているが、その利用はまだ少なく、波及効果という面では、地元にはあまり実感ないだろうとの見解であった。

(2) 構成資産間における人気の格差

『富岡製糸場と絹産業遺産群』では、製糸場ばかりが目立ち、他の3件の構成資産が影に隠れ

た形となっている。このことについて、群馬県世界遺産課は「この3件の構成資産は、もともと観光地でなかったことが大きく、4件で世界遺産の価値があるという理解が一般にまだ浸透していない」との見解に立つ。また、「観光客は、富岡製糸場を見学した後、他の資産までなかなか足を延ばさない。各資産間は距離もあり、公共交通機関では行きにくい。そもそもその存在自体があまり知られていない3資産に対して、観光客にどうやって興味を持ってもらえるのが課題である。しかし、この3資産に製糸場並みの人が訪れると、その資産価値を損なう恐れもあることから、バランスを取るのが難しい」としている。

(3) アクセス面の課題

富岡製糸場をはじめ、他の3施設間はそれぞれ約30kmずつ離れている。ファミリーはマイカーで、団体は貸し切りバスで移動することが多く、周遊バスのニーズはあるものの採算のとれる規模ではない。

また、4資産間の周遊ニーズがなくても、そもそも資産全部を1日で回るのは非常に困難である。現在、大手旅行会社が1日で4資産を回る不定期ツアーを組んでいるが、4件目の「荒船風穴」への到着が17時頃と、ガイドがいない時間帯となるため、観光客は資産の詳しい説明を受けることなく、単に風穴を見るだけとなってしまっている。

このような理由から、4資産を回る定期バスの運行は実現できない状況にある。また、別の旅行会社が軽井沢と富岡製糸場との間に予約制の路線バスを運行しているがその利用者も少なく、群馬県のバス業者が県内観光地と富岡製糸場とを結ぶバスを運行してみたが、これもニーズが見込めなかった。さらに、富岡市と安中市が協同でJR信越本線の駅とを結ぶバスを運行したが、これも利用が芳しくなかった。圧倒的にマイカーで訪れる観光客が多いことから、公共機関による各資産間や各都市間を結ぶルートを作成することが難しく、車を使えない観光客に対しては周遊が厳しい世界遺産といえよう。

IV. 世界遺産登録推進のポイント

前述の「NPO法人富岡製糸場を愛する会」の高橋理事長は、世界遺産登録を成功させ、認定後も地域を盛り上げていくためには以下が重要であると提言している。

1. 民間との連携を強化するための推進組織を行政内に確保すること

世界遺産の登録を推進していくためには、まず、最初に行政が予算を投入して専門組織を作らなければならない。地域の宝として、世界に売り出していったら当然、という地域住民の理解も重

要であり、住民との文化価値の共通認識が必要である。要は本気度の問題であろう。

2. しっかりしたすばらしい物語を作り上げること

『富岡製糸場と絹産業遺産群』でいえば、日本の近代化に貢献した、というだけでは世界遺産になっておらず、世界にアピールできる物語を作らなければならない。この例では「貴族などの上流階級のものであった絹が、一般市民にも使用できるようになったことで、国際的な絹文化の大衆化につながった」といったアピールを世界に向けてどこまでできるのかにかかっていた。

今年の愛する会の活動には、『富岡製糸場と絹産業遺産群』に関してまず富岡市に、次に群馬県議会に対して“世界遺産にふさわしい富岡を作るために”として ①世界遺産博物館の設置 ②製糸場周りの周辺整備 という新たな提言が掲げられている。このように「世界遺産認定後も、民間の活動と行政とが一体となって地域のことを考えていくべきだ。」としている。

おわりに

富岡市によると、「富岡製糸場最寄りの公共交通機関である、ローカル線の上信電鉄(株)の2014年の売上は、前年比約6千万円プラスと大幅に伸びている」とのことであり、「世界遺産登録による波及効果は、直結する交通機関には及んでいるが、地元には今ひとつ」という認識であった。しかしながら、群馬県の昨年の観光客数(推計)をみると6,181万人と、前年比30万人増(+0.5%)となっており、富岡市で92万人増加したことがその増加要因の1つに挙げられている。世界遺産登録からまだ1年しか経過していないことから、その効果はしばらく期待できよう。

群馬県世界遺産課では、「県内にある35自治体のなかで、世界遺産の構成資産を有する自治体は4自治体しかない。世界遺産を目当てに群馬県を訪れた人には、その他多くの絹関連遺産にも目を向けてもらい、県内全域に世界遺産効果が広がるようにしていきたい」と考えている。また、数年後に予想される世界遺産ブームの落ち着きを見据えた取組みとして、今年4月に文化庁が初認定した「日本遺産」の国内18カ所のうちの1つ『かかあ天下ーぐんまの絹物語ー』と、県が認定している91カ所に及ぶ『ぐんま絹遺産』、これに世界遺産『富岡製糸場と絹産業遺産群』とを合わせた3要素により、群馬県を楽しんでもらえるような仕掛けを作っていきたいとしている。

1930年代、世界の生糸輸出量の8割は日本製であり、世界中で日本の生糸が使われていたが、現在では、国内で使われている生糸のうち、国産は1%程度しかなく、日本で織った着物といっても、その糸はほとんどが外国産となってしまった。群馬県は、県内中部から北部に繭をつくる養蚕業、西部は養蚕と製糸業、東部は養蚕と絹織物業と、地域全体が絹産業に関わっていたが、

今では養蚕農家が140戸しか残っておらず、もはやそれを生業としている家庭もかなり少ない。富岡市では、「シルクブランド協議会」を立ち上げて、製糸場内で市内の養蚕農家で作ったシルク製品の販売を行うなど、今も残る12軒の農家を応援すべく養蚕からその製品化までを支援する取組みを行っている。

産業遺産の世界遺産登録は、交流人口の拡大に寄与して地域に賑わいをもたらすが、この『富岡製糸場と絹産業遺産群』に関してはそれだけではなく、伝統ある地域産業・日本文化の継承にもつながることから、その魅力を一層高めることにより、国内、海外からも注目を浴びる世界遺産となることを望む。

(杉本 士郎)